

小学校3年体育科

# 「リズムダンス」 (全7時間)

授業者 溝口 仁志

## 実践の概要

この実践は、いろいろなリズムに合わせて踊りを楽しみながら、「ものまねダンス交流」を通して、多様な踊りを創り出すことにチャレンジしたものです。「ものまねダンス交流」とは自分の考えた踊りを表現する際に、見ている友達もその踊りを即興でまねをする活動です。子供にとっては学習の成果を表現する場でもあり、友達の踊りをまねすることで多様な動きを実感できる場にもなると考えました。

夢中になって踊ることができるよう、学習のルール・マナーを明確に示したり、子供のニーズにあった楽曲や活動を取り入れたりしました。

## 授業のねらいと展開

この授業のねらいは、リズムに合った動きや新たな動きを考えたり、友達の動きを自分の踊りに生かしたりしながら踊りを楽しむことです。さらに、「フェアプレイ」を合い言葉にルールやマナーを守り、友達と認め合い、アドバイスをしながら活動することです。

「①教師のまねをしながらリズムにのって踊る」→「②友達と一緒に新たな動きを見つける」→「③チームで踊りを交流し合う」という学習プロセスによって運動する中で、課題解決に向けて活動を工夫する力、学んだことを言葉や動作等で表現する力、フェアプレイで運動する態度などの資質・能力を育てていきます。

単元目標を最初に子供たちに示すことで学習の方向付けを行い、その目標に向かう中で生まれる課題を子供が自覚化、共有化できるよう支援していきます。

### 単元の展開



①教師のまねをしながらリズムにのって踊る



②友達と一緒に新たな動きを見つける



③チームで踊りを交流し合う

視点1:学びの文脈のある単元を構想する

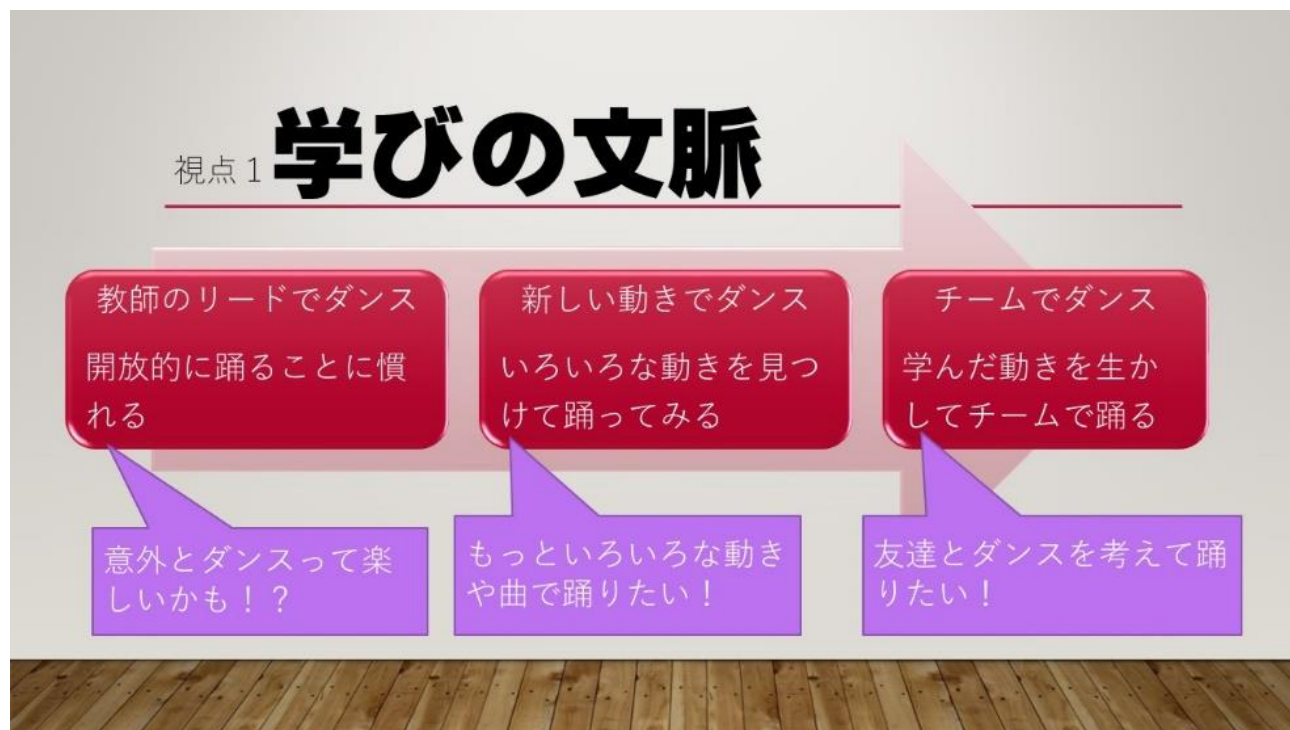


図1 本実践における「学びの文脈」イメージ

子供が学びの連続性、必要性、関連性を自覚しながら学ぶことができるように学びの文脈のある単元を構想します。単元1時間目ではオリエンテーションとして単元目標や学習のルール・マナー、学習の進め方、学習カードの記入方法等を確認します。この活動により、学習への見通しをもち主体的に取り組めるようにします。次に、教師の動きをまねてリズムにのって踊る活動により、踊りに対する抵抗感を無くし「踊ることって楽しいかも！」という思いがもてるようにします。この時、教師は誰でもまねできるような易しい動きにすることがポイントです。易しい動きの踊りをくり返し行っていると、子供たちからは「もっとかっこよく踊りたい」「もっといろいろな動きで踊りたい」という思いが生まれていきます。

このような思いを生かして2～3時間目からは、友達といろいろな動きで踊る活動に移行していきます。ペアやグループは固定せずに、好きな友達と一緒に踊りを楽しみます。教師は新しい動きで踊っている子を紹介したり、まだ踊りに抵抗感のある子と一緒に踊ったり、ペアを変えることを指示したりしながら新しい動きを広める支援をします。ここで、学んだ多様な動きが次の学びにつながっていきます。

単元終盤である4～7時間目では、多様な動きを生かしてチームで踊る活動を設定します。どの子も学習の主体となれるよう4～7名でチームを決めてダンスを創る活動です。チームダンスを交流することで、学習成果を認め合えるようにします。（図1）



図2 本実践における「必要感のある協同的な学び」イメージ

新たな動きを考え、友達の動きを自分の踊りに生かすことができるようにするため、ペアやチームでの学びの場を取り入れます。「ものまねダンス交流」では、踊りを単に見るのではなく、まねして一緒に踊ることで多様な踊りに触れ、そのよさを実感できるように意図します。友達がまねをして一緒に踊ってくれることで、自分たちの踊りをサポートしてくれている気持ちになり、ノリノリで踊ることができるようにします。(図2)

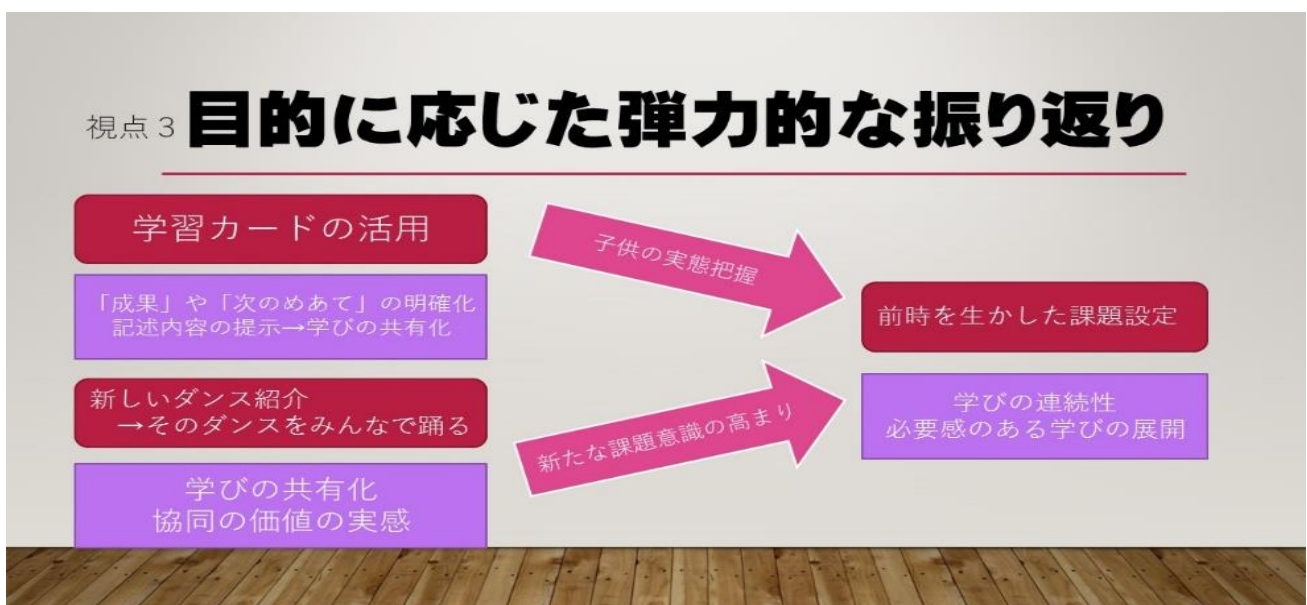


図3 本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」イメージ

毎時間の学習を振り返りことができるよう、学習カードを記入する場を設定します。振り返りの視点は①学んだこと（感じたこと・気付いたこと）②次に向けて③すてきな友達です。これは、子供が学習成果や次のめあてを明確にできるようにするための視点です。さらに、学習カードの記述を一覧表にまとめ、子供に配付することで、友達のめあて、学習成果、友達のよさを共通理解できるようにします。

また、振り返り場面では、新しい踊りを紹介し合い、その踊りをみんなで踊ることで、学習成果の共有化と協同的な学びの価値を実感できるようにします。

教師は学習カードの記述から子供の課題意識をとらえ、次の学習へ生かすことを大切にします。そして、振り返り場面で共有化した新たな動きをキーワード化してフラッシュカードで表すことにより、視覚的にも学びが蓄積されている、学びが連続していることを意識できるようにします。（図3）

## 授業者からのコメント

### 創造性のある学び＝アクティブ・ラーニングにフィットする

今回の実践を通して感じたことは、リズムダンスの単元においてアクティブ・ラーニングがとてもフィットしているという点です。私は今まで、ボール運動や器械運動などいろいろな運動領域でアクティブ・ラーニングの実践をしてきました。それらと比較すると、リズムダンスは以下の二点において大きな違いがあることに気づきました。

一つ目はリズムダンスが創造性の要素が強い学びである点です。リズムダンスは学習のねらいに動きを創り出すという内容があります。したがって、新たな動きを考えるために試行錯誤したり、友達の動きをヒントに動きを見付けたりする活動により、創造性のある学びになりやすいのです。

二つ目は柔軟にグループ編成が行える点です。ボール運動や器械運動であると、チームが固定化されていたり、課題ごとにグループが構成されたりします。しかし、ダンスの場合はペアで踊ることも数人のグループで踊ることも可能です。また、そのペアやグループは柔軟に変えていくことも可能でした。したがって、多様な友達と学び合うことができるので協同的な学びのよさをより実感することになりました。

特に一つ目の創造性の要素を取り入れることは、他の運動領域でも可能ではないかと考えています。他の運動領域においても、子供が動きを工夫したり、自分たちに必要な活動を考えたりする学習活動を保障していくことが「課題解決に向けて活動を工夫する力」や「学んだことを言葉や動作等で表現する力」の育成につながっていくのだと感じました。

### 協同的な学びがつまずきのある子供を救う

実践を進めていく中で踊りに消極的な子供がいました。私はその子供に自分の踊りのまねをさせたり、積極的にアドバイスをしたりして踊れるように支援をかけていきました。しかし、その子が大きくダンスに対して前向きになったのは、私の直接的な支援ではなく友達の「一緒に踊ろう」の一言でした。その後、その子供は自分のオリジナルダンスを創ることを課題として、主体的に学びを進めていきました。単元終盤では、動きの

停滞している子を見かけたときに、その子の手を引いて私のところに連れてきて「先生も一緒に踊ろう」と言うまでに変容していました。

このことから、私は教師が子供一人一人に丁寧に支援することには時間的にも量的にも限界があり、その限界を広げるためには、協同的に学べるような環境構成や子供の協同的な学びが促進するような支援がより重要であることを実感しました。さらに、子供は協同的に学ぶ経験をくり返すことで、相手を尊重しながら、運動することの価値を実感し、フェアプレイで運動に取り組む態度が徐々に形成されていくのでしょうか。



協同的に学べるような環境構成・活動設定

## 活動と活動を「振り返り」でつなげる

授業を見ていただいた先生から「先生は必ず活動のあと『振り返り』から入るね」と言われました。思い起こしてみると、確かに私は、子供が踊った後に「新しい動き見つけた？」「今のダンスは何点？」「困っていることない？」「友達のいいなと思うダンス紹介して」とうように、直前の活動を振り返るような発問を自然と行っていました。授業の初めにも「この前のダンスの学習ではどんなことしたっけ？」「この前のダンスで出た新しい動きおぼえている？」など振り返りから入っていました。また、授業を見ていただいたその先生からは「振り返ることを常に意識させていることで、子供たちが常に課題意識をもって学んでいる」と評価していただきました。

これらのことから、身体的活動が学習の中心となる体育の学習において、その活動で「何を学んだか」を子供たちが常に自覚的になるような支援をくり返していくことで、子供たちが自然に自分の活動を振り返り、次の活動に課題意識をもって取り組む力を育てていくことができると感じました。



前時の学習を振り返り本時の課題を設定する